

《모든것을 아이들의 성장과 행복을 위하여》福岡朝鮮初級学校

~すべては子ども達の幸せと成長のために~

후쿠오카조선초급학교



コロナ感染予防に努めながら学ぶ喜びの毎日を



園で田植え体験



ペンギンと遊びたい



セター短冊に願い



世界のおやつ作り



たくまい朝鮮相撲



トランポリン、楽しい



初1,2水泳の授業



ウリマル対話実演



図工作品



それぞれの感性が交り合う



夏はハマワリ



オモニ会から差し入れ



北九州舞蹈部と合同練習



学区連合少年団交流



メダカの飼育



少年団75周年を祝う



真剣にウリマルを学んでいます

大人数にも、少人数にもそれぞれマッチ・デミットがあります。しかし、すべてにおいてそれが当てはまる場合とそうでない場合もあります。大切なのは目の前にいるウリハッキョの子どもたちを保護者、教職員、社会が一緒に育てていくことだと思います。子どもたちの可能性は広がります。

卒業生が「カメの水槽」をリニューアル

ソンセンニムも言わせて！～教育は大人が子どもに送るメッセージ～



張時榮先生(55期卒)のように生き物を大切に飼います

〈排外主義にNO！福岡〉の竹森真紀さんから園児たちへ



楽しく遊んでいます

ずっと残したい一枚の写真



大会会場の福岡ベイパイドームの前で

フットボールサッカークイズ

なまえ

(なぜ、私の名前は「ミヨンスギ」なんだろう?)

だからといって自分の名前が嫌いというわけではなく、でも私の名前は隣のお家の「リエちゃん」みたいな一般的な名前ではないわけで、妹とも属性の違うこの名前に子供ながら感じる違和感。そして家に帰ると「ミヨンスギ」と呼ばれる自分がある...

日本の幼稚園に通っていた私は、お友達の名前を呼ぶたびに不思議とこう思っていました。今考えると、私のアイデンティティの確立の原点なのかもしれません。

小学校入学時、周りの友達とは当り前のように校区の日本学校へ行き、同じ学校へ自分も行くものだと思っていた矢先、ウリハッキョ(私たちの学校=朝鮮学校)へ車は走ります。言われるがまま制服の寸法。そこから私のチョンサムへの第一歩が始まるわけです。

じつは私の名前は自分の両親がつけた訳ではありません。

当時は子の親の親、つまり祖父母が名前をつけるという風習が残っており、自然と我が家でもハラボジ(祖父)に委ねていたそうです。そのハラボジはというと、トシネ(町内)皆さんと相談し(これもよくあることだったそうですが)、考えた結果「明淑(ミヨンスク)」という名をつけてくれたのです。

(しかしながら、皆が私を生める直前まで「男」だと思っていた事、そして母子手帳に院長が間違えて「男」と押印されたというのは紛れもない事実だそうです。)

今考えると、ただただ不思議としか言いようがありません。

もう一つ、私のハルモニ(祖母)です。

私の生まれは山口県宇部市ですが、そのころハルモニは吉敷郡小郡町(現山口市小郡)に住んでおり、ハルモニの新しい姓で「警道口(鬼ごっこ)」をしては叱られました。お正月には空から乾いた田んぼで向をあげ、日に一回遠くから汽笛がなると、「来るぞ!」という恐怖心と観たいという好奇心が入り混じりながらSLを目の前にして手を振ったりもしました。

ハルモニのお家に行くことも、いつもそこには一年生の国語の教科書がボツンと置いてありました。

開くと、ひらがなの上に朝鮮語で読み仮名が記されているのです。ウリハッキョに通い始めた私は徐々にその記された朝鮮語も読めるようになり、子供ながらハルモニはそれを教科書代わりに字を読む勉強をしている、そう思えるようになりました。

若き日のころのハルモニには、「使用人」が何人もついてたそうです。そう、今というお嬢様。一時は祖国への帰国の準備をしていたそうでしたが、帰国直前ハラボジが病氣にかかり、兄たちだけ帰国し、惜しくもハルモニは残ることとなったわけです。

若くしてハラボジが亡くなった為、私はハラボジの記憶はほとんどありません。ハルモニの記憶だけです。そんなハルモニも実は焼肉屋を切り盛りしながらも、夜間に学校に通って字を習っていた事を後で知りました。

ハルモニは私のことをいつも「ミヨンスギ」といわず、「メンスギ」と言っていました。その言葉を聞くたびに、おかしなことで笑ったりもしました。でも、それが「サツッパ(方言)」ということを知った時に、長い月日を要しました。

私達が帰るときには必ず、「サルサルカゴラ(気をつけて帰らない)」と車窓に向かって一言添えてくれるハルモニの声が今も頭の中で響きます。

今では私自身身を持ち親となり、子供を「フリコチパン(朝鮮幼稚園)」から通わせながら、私とは違う「違和感のない世界」に新鮮味を感じました。今は自分の名前や存在を隠すことなく、堂々と言えるグローバルな時代になったものだ、つくづく感じております。

自分の幼少期が一層フィードバックされ、理解できなかった矛盾が一つの線で繋がっていくようです。嫁ぎ先では、主人の祖父の話をたくさん聞きました。そして、主人は自分のルーツを知ろうとアクティブに動き回ります。そばで見ていていつも感心しますが、自然と私も自分の(聞かぬという)ルーツを知っておかねばと焦りを感じたりもします。在日コリアンが「今現在」も在日で居続けるルーツでもあるのです。

学校が創立60周年を迎え、その歴史を児童と話し合うなかで、自身の過去を知るという事も大切だとしみじみ感じました。

若い世代が受け継ぐ為、とかではなく、自分の「命」と向き合う事こそが、己の使命なのかもしれません。

2021.6.11

「関先生と出会ってあっという間に十数年が経つ。彼女は変わらない。どんなに大変な時でも弱音を吐かない、愚痴をこぼさない、逃げない、言い訳をしない、人のせいにならない。心底信頼・信用できる、頼りになる同僚である。」【カバ先生】

福岡ハツキョ支援一口千円募金運動 月額1000口を目標に卒業生、同胞と世界に向け支援を呼びかけております。一人の100万円は大切、千人の1000口は素晴らしい。宜しくお願いします。

